

## 影響・脆弱性・回復力をふまえたリスク評価の 試行的検討（ケーススタディ）について

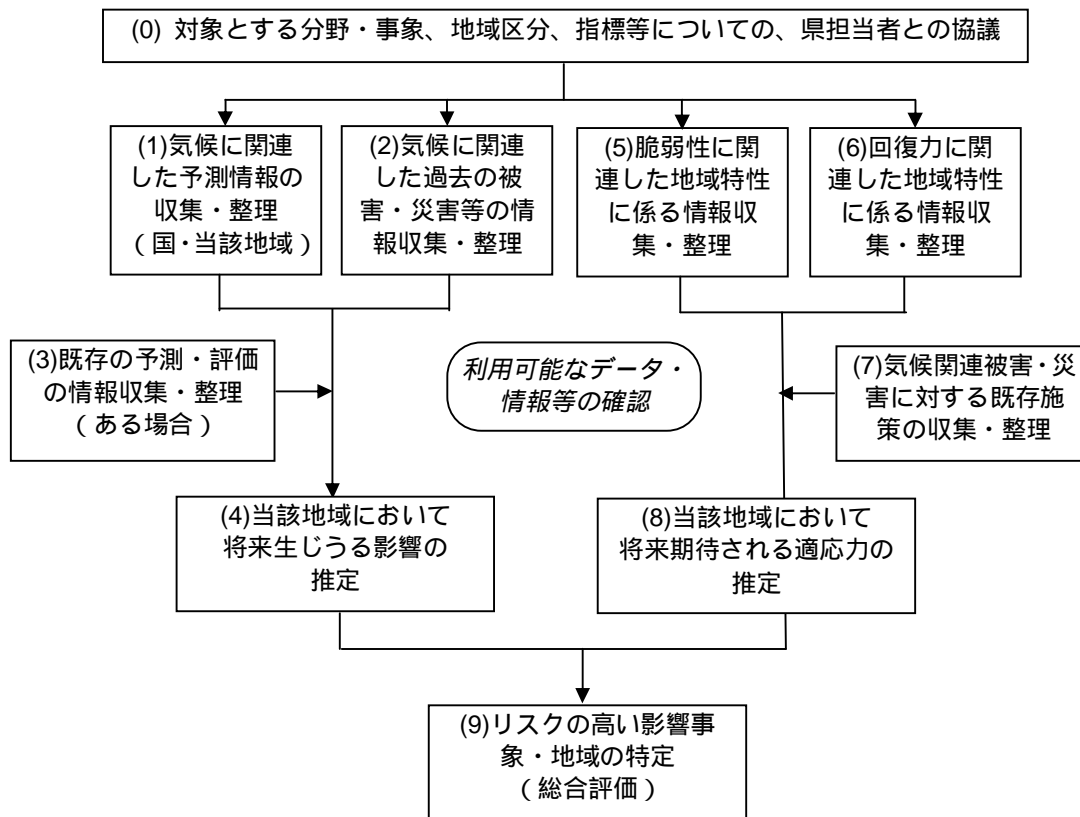
### 1. 目的

気候変動による**影響**と、その影響に対する**脆弱性**（影響の受けやすさ、対処できない度合い）・**回復力**（影響を受けても構造や機能を維持できる力）を踏まえたリスク評価のあり方について、実際にいくつかの分野を対象とした試行的検討（ケーススタディ）を実施する。

本ケーススタディは、この過程と成果を通じて、地方公共団体の行政担当者等が実施しやすい、包括的なリスク評価の枠組みや、収集すべきデータ、具体的な評価手法、課題等を明らかにすることで、「気候変動適応の方向性に関する検討会」における検討に資することを目的として実施するものである。

### 2. 検討の手順

本ケーススタディは、基本的に下図の流れに沿って実施する。



気候変動による影響・脆弱性・回復力をふまえたリスク評価の流れ

### **3. 本ケーススタディにおける情報収集・検討手順**

#### **(1) 気候に関連した予測情報の収集・整理**

気候変動に関連した予測情報について、国や当該地域（対象とする県とするその周辺）に関する予測情報を収集・整理する。「温暖化の観測・予測及び影響評価統合レポート 日本の気候変動とその影響」（2009年、文部科学省・気象庁・環境省）等、最新のレポート・研究成果等を参照する。また、その際には、予測される影響の程度（影響の大きさ）に加え、その予測に関する不確実性の性格と程度（起こる可能性）にも留意する。

#### **(2) 気候に関連した過去の被害・災害等の情報収集・整理 < 情報提供等をお願いしている事項 >**

分野ごとに、当該地域での気候に関連した過去の被害・災害等の情報を収集・整理する。

#### **(3) 既存の予測・評価の情報収集・整理 < 情報提供等をお願いしている事項 >**

分野ごとに、当該地域において気候に関連した被害・災害等を予測・評価した事例が存在する場合には、これらの事例でとられている予測手法やその予測・評価結果に関する情報を収集・整理する。例えば、防災分野であれば洪水の氾濫予測等、気候変動影響の予測・評価とは別の目的で従来から用いられている予測・評価事例が想定される。

#### **(4) 当該地域において生じうる将来影響の推定**

(2)の過去の被害・災害等の情報と、(1)の国・当該地域における予測情報とを突き合わせて、当該地域において生じうる将来影響を推定する。推定にあたっては、専門家のアドバイス等も受ける。なお、(3)の既存の予測・評価事例が存在する場合には、その予測に将来の気候変動を加味した影響の予測/推定を行うことができないか検討し、可能な場合にはその予測/推定を行う。

#### **(5) 脆弱性に関連した地域特性に係る情報収集・整理 < 情報提供等をお願いしている事項 >**

分野ごとに、当該地域の脆弱性に関連した地域特性に係る情報を収集・整理する。自然的特性、社会的特性の両面から、脆弱性を推定する上で特に重要となる主要な情報を収集する。

#### **(6) 回復力に関連した地域特性に係る情報収集・整理 < 情報提供等をお願いしている事項 >**

分野ごとに、当該地域の回復力に関連した地域特性に係る情報を収集・整理する。自然的特性、社会的特性の両面から、回復力を推定する上で特に重要となる主要な情報を収集する。

**(7) 気候関連被害・災害に対する既存施策の収集・整理** <情報提供等をお願いしている事項>

分野ごとに、気候関連被害・災害に対する主要な既存施策（計画中のものを含む）を各分野の基本計画やその年次報告等から収集・整理する。その際、「温暖化・気候変動」等の名称が含まれていないものでも、気候、気象災害等に関連性のあるものを対象とする。

**(8) 当該地域において将来期待される適応力の推定**

分野ごとに、(5)で整理した脆弱性、(6)で整理した回復力に関する情報に、(7)の既存施策による効果も加味し、当該地域において将来期待される適応力を推定する。

**(9) リスクの高い影響事象・地域の特定**

分野ごとに、(4)で推定された将来影響と、(5)で推定された適応力とを突き合わせることで、予測される影響が大きく、これに対する対適応力が十分でないリスクの高い影響事象・地域を特定する（具体的な地名は公表するものではない）。